

高適の「酬裴員外以詩代書」詩について

今場 正美

岑参とともに辺塞詩人として有名な高適の「裴員外に酬ゆるに詩を以て書に代ふ」という詩を取り上げる。この詩は肅宗乾元二年（七五九）、彭州（現四川省彭州市）刺史着任時の作で、全九四句の長篇である。高適が卒したのが代宗永泰元年（七六五）であることから、この詩は晩年の傑作と言ふべきであろう。旧友と再会し、贈られた詩に答えたもので、過去を回想して詠じられたこの詩は、その生涯を知る上で重要であり、また辺塞詩人とは別の一面を知る上でも興味深い。

詩題の「裴員外」とは裴覇で、その兄弟について詩に「兄弟真に二陸、声華は八裴に連なる（あなたがた兄弟は陸機と陸雲に匹敵し、裴氏の父の代の兄弟八人は輝かしい名声を有する）」と詠じている。裴覇は裴寛の姪に当たり、『旧唐書』巻百「裴灌伝」附裴寛（灌の従兄弟）伝に「寛は通略、文詞を以て進み、騎射・彈棋・投壺は特に妙なり。（中略）寛、性は友愛にして、弟兄多く宦達し、子姪も亦た名称有り」とある。員外は員外郎で、尚書省の二十四司の次官。『新唐書』巻七十一上「宰相世系表一上」によれば、父の裴卓は岐州刺史、兄の騰は戸部郎中、清は秘書監、覇は吏部員外郎になっている。

一 少壮期の回顧

詩はまず冒頭の四句で少壮の頃を回顧する。

少時方浩蕩 少時方に浩蕩たり

遇物猶塵埃 物に遇すること猶ほ塵埃のごとし

脱略身外事 身外の事を脱略し

交遊天下才 天下の才と交遊す

「若い頃は全く自由気ままで、功名や富貴など取るに足らぬものと思っていた。自分のこと以外は意に介せず、天下の才子と交遊をもった」とは事実であろう。それは、開元八年（七二〇）後、二十歳過ぎに宋州（現河南省商邱市）で作られた詩にも共通した内容が見られるからである。

例えば、「宋中」詩（十首の其七）には、蒙（宋国の地名）の「漆園の吏」であった莊周を「世事は浮雲の外、閑居す大道の辺（この世の事は浮雲のごとくふわふわと虚しいことと見なし、大きな道の辺で静かに暮らした）」と詠じ、『莊子』齊物論篇の「天地も一指なり、万物も一馬なり」を、「古来一馬に同じくし（万物は古来より一頭の馬であるとした）」と言うのは、「今我も亦た筮を忘る」と結ぶように、莊周を懐かしむと同時に、高適自身が古人と同じ境地に至っていることを示すものである。

また、その交遊も世人とはいささか異なったものであったようである。例えば、「韋参軍に別る」詩に「世人は我に向いては衆人に同じくすれども、唯だ君のみ我と最も相親しむ。且つ喜ぶ百年交態有れども、未だ嘗て一日も家の貧なるに辞せず（世の人々は私を普通の人と同様に見ますが、あなただけは私にとって最も親しい仲だ。昔、鄭當時は人生百年の間に富貴と貧

乏を繰り返して世情を知ったというが、あなたは今まで一日たりとも私が貧乏だからといって付き合いを拒んだことはなかった」というような、身分や境遇を越えて保ち続ける友情がそれである。ところで、この詩の冒頭「二十にして書剣を解し、西のかた長安城に遊ぶ」の句は、二十歳の時に仕官を求めて都に至ったことを言うが、結局その願いはかなわなかった。また、「龐十兵曹に酬ゆ」詩の「梁城古意多く、手を携えて共に悽惻す（梁の地には数々の故事があり、あなたとともに偲んで悲しんだ）」より、龐氏がしばし高適と行動をともにしたことが知られるが、それは猛志を抱いて長安に向かいながら、仕官の願いがかなわず落胆する高適を慰めるためであったのかもしれない。そんな龐氏に対して、「世情は疵賤を悪めども、之の子は孤直を憐れむ（卑賤の身の私を疎んじるのが世の習いであるのに、あなたは片意地なこの私を憐れんでくださった）」と感謝の気持ちを書わにしている。

二 裴覇との出会い

開元二十年（七三二）、北の燕趙の地に向かった高適は、信安王の幕府に入りたくと願った。「信安王幕府詩」はその序「開元二十年、国家、林胡に事有り。礼部尚書信安王に詔し、戎を総べて大挙せしむ。時に考功郎中王公・司勳郎中劉公・主客郎中魏公・侍御史李公・監察御史崔公、咸幕府に在り。詩以て数公を頌美し、詞に見はず、凡そ三十韻」よりこの年の作であることが知られる。詩は信安王に封ぜられた李禕を、「桐を剪りて寵錫^{あまね}光く、劍に題して貞堅を美す（李禕殿が信安王に封ぜられ、天子からその貞堅なる節操を讃えられ、名を記した劍が贈られた）」と讃え、これに幕府の俊秀の士とその戦功を讃える句が続く。ただ結局、この願いはかなわなかった。その後、推挙に応じて長安に赴く（結果は落第）開元

二三年（七三五）までの数年間をこの地で過ごし、この時に裴員外（覇）と出会うのである。

單車入燕趙	單車燕趙に入り
獨立心悠哉	獨立して心は悠なるかな
寧知戎馬間	寧ぞ知らんや戎馬の間
忽展平生懷	忽ち平生の懷を展ぶるを
且欣清論高	且つ欣ぶ清論の高きを
豈顧夕陽頹	豈に顧みんや夕陽の頹るるを

「一台の車で燕趙の地に至り、一人そこに立てば心はなんとゆつたりとしていることだろう。軍中であなたと出会い、たちまち平素からの心の内を語り合う仲になろうとは思ってもみなかった。高尚なあなたのことばに心は弾み、日が西に傾くのも気づかぬほどでした」。思わぬ出会いながら、よほど気が合ったのであろう。

次の六句は、燕の昭王ゆかりの古跡をとにもめぐり、酒を酌み交わし、詩作に興じたことを詠じたものである。

題詩碣石館	詩を碣石館に題し
縱酒燕王台	酒を燕王台に縦にす
北望沙漠垂	北のかた沙漠の垂を望めば
漫天雪皚皚	漫天雪は皚皚たり
臨辺無策略	辺に臨んで策略無く
覽古空徘徊	古を覽て空しく徘徊す

「碣石館で詩を詠じ、燕王台でほしいままに酒を飲んだ。沙漠が広がる北の境界を望むと、空一面雪で真っ白だ。辺塞に臨みながら策略もなく、昔のことを振り返ってうろろするばかり」。信安王の幕府に入ることができなかつたという挫折感が反映しているのであろうか、功績を挙げる手立てを失った虚しさが漂っている。

こうした心境は、この時期しばらくは続いていたのである。例えば、「薊門にて王之渙郭密之に遇はず、因りて以て留贈す」詩は、冒頭四句で「適々遠く薊丘に登り、茲の晨独り搔屑たり。賢交見るべからず、吾が願は終に説き難し（遙か薊丘に登った朝、風だけが寒々と吹いていた。才徳の友とは会えず、私の願いを伝えることができなかった）」と詠じるが、そこには、友人たちに自己の願いを伝えようと出会いを期待していたのにそれがかなわず、ひとり薊丘に登って寒々とした風に吹かれる姿が描かれている。そして、遙か遠く離れた友人を思いながら、「時に逢ひて事多く謬り、路を失ひて心弥々折る。行かん重ねて陳ぶる勿れ、君を懐ひて但だ愁絶す（よき時代に生れながらうまくいかないことばかり、進むべき道を見失って心はうちひしがれた。さあ行こう、もう何も言うまい、あなたのことを思うと悲しみに心がふさがるばかり）」と結び、失意の自己を無理にでも奮い立たせようとしている。一方、「古に効ひて崔二に贈る」詩の「我は慙づ経済の策、久しく棄置に甘んぜんと欲す。君は縦横の才を負ふに、如何ぞ尚ほ憔悴せる。（中略）窮達自ら時有り、夫子涙を下す莫かれ（世の中を救う政策を持ち合わせず、長い間、世間から見捨てられたままそれに甘んじてきたことが恥かしい。あなたは思うままにできる優れた才能がおりなのに、どうして苦しみ疲れたままなのか。（中略）行きづまるかうまくいかは時の運、どうか涙など流したりせぬように）」の如く、自己と同じく不遇な情況にある友人に対しては心優しく励ましている。

さらに失意の詩人は、燕の地に縁が深い二人の人物を登場させる。

楽毅吾所憐 楽毅は吾の憐れむ所

拔斉翻見猜 斉を抜きて翻つて猜はる

荆卿吾所悲 荆卿は吾の悲しむ所

適秦不復廻 秦に適きて復た廻らず

然諾多死地 然諾死地多く

公忠成禍胎 公忠禍胎を成す

「気の毒なのは燕の昭王に仕えた楽毅將軍、斉の七十余城を攻め下す功績をあげながら、結局疑われて趙に逃れた。悲しむべきは燕の太子丹のために刺客となった荆軻、秦王政暗殺の命を受けて秦に行つたまま帰らなかった。」「口約束を守って死地に赴けばしばしば命を落とすことになる」とは荆軻を、「忠誠無私であつてもそれが禍根となる」とは楽毅を、それぞれ評したことばである。燕の地で古を振り返り感慨にふけると同時に、現実に対する不平や自己の境遇に対する不満が寓されている。

三 裴覇との再会

二十余年の歳月を経て再び出会つた裴覇に対して、高適は他の友人以上に深い縁を感じていたのかもしれない。

与君從此辞 君と此れより辞し

每恐流年催 毎に恐る流年の催すを

如何俱老大 如何せん俱に老大となるを

始復忘形骸 始めて復た形骸を忘る

兄弟真二陸 兄弟真に二陸

声華連八裴 声華は八裴に連なる

「あなたと別れてから、流れるように年が過ぎてゆくのをいつも恐れていました。ともに年老いたのは如何ともしがたいけれど、再会してまた形の交わりを結ぶことができた」と心から再会を喜び、「あなたがた兄弟は陸機と陸雲に匹敵し、裴氏の父の代の兄弟八人は輝かしい名声を有する」と裴覇の兄弟を褒め称えている。

裴覇との再会までに、高適は多くの土地を訪れ寓居し、さまざまな経験をしているが、裴覇に語られるのは、天宝十四載（七五五）以後の安史

の乱の情況である。

乙未将星変じ

賊臣候天災 賊臣天災を候ふ

胡騎犯龍山 胡騎龍山を犯し

乘輿経馬嵬 輿に乗りて馬嵬を経たり

千官無倚着 千官倚着無く

万姓徒悲哀 万姓徒だ悲哀するのみ

誅呂鬼神動 呂を誅せんとして鬼神動き

安劉天地開 劉を安んじて天地開く

奔波走風塵 奔波風塵に走り

倏忽値雲雷 倏忽として雲雷に値ふ

「乙未の年（七五五）に將軍の星が異変を起こし、賊臣（安祿山）がそれを察知してか叛乱を起こそうとする。賊軍が龍山を侵略すると、天子は都を逃れ馬嵬駅を通った。朝廷の多くの官吏が抛り所を失い、民衆は悲しむばかり。陳玄礼が楊国忠一族を誅殺したのは、漢の周勃が呂産・呂祿を誅したのと同様、鬼神を驚かせる働きで、ともに国家に安寧をもたらした。疾駆して風塵を巻き上げて逃れ、たちまち天子が経綸する世が訪れた」と概括する。

天宝十一載（七五二）十一月、世の政治を牛耳っていた李林甫が卒すると、楊国忠が代わりに実権を掌握する。もはやライバルは安祿山を残すのみである。楊国忠は安祿山に叛乱の兆しがあることを察知していた。既に汴州封丘県（河南省）の尉を辞していた高適が、判官田梁丘の推薦により隴右節度使哥舒翰の幕府に入ったのはこの年のことである。安祿山排斥をもくろむ楊国忠は、かねてより安祿山と不仲の哥舒翰と結ばんとし、翌年、翰に河西節度使を兼任させている。天宝十四載（七五五）十一月、范陽・平盧・河東三道節度使の安祿山が范陽で叛乱の狼煙を上げた。

楊国忠等側近の忠告は、安祿山を寵愛する玄宗の耳には一向に入らなかったのである。安祿山は東都洛陽を目指して南下した。これを迎え撃つのが范陽・平盧節度使に任命された封常清である。この時、楊国忠も封常清も安祿山を見くびっていた。十二月、賊軍によって洛陽は陥落する。封常清は高仙芝に潼関を守らせて、首都長安への侵入を阻止しようと守備を固めたため、賊軍もこれより西に行くことができず、兩軍対峙の状態が続いた。敗戦の責めを受けた封常清と高仙芝は勅命によって斬首され、代わりに病身の哥舒翰が起用された。この時、翰に仕え左拾遺から監察御史に転じていた高適も潼関の守りに当たっている。翌天宝十五載（七五六）、左僕射・同平章事を加えられた哥舒翰に対して、楊国忠は警戒心を抱き始め、その策略により翰は潼関からの出撃を余儀なくされた。果たして惨敗を喫したが、これは哥舒翰のほか郭子儀・李光弼が潼関を固守すべきだとする進言に、天子が耳を貸さなかったためである。詩の「胡騎龍山を犯し」の龍山は龍首山（龍首原）のことで、宋敏求『長安志』（卷十二）に「龍首山は、（長安）県の北十里に在り」とあり、また『括地志』を引いて「今案ずるに、山首は長安故城中に在り」と記す。賊軍が長安に侵入するのは時間の問題で、哥舒翰が潼関で敗れると、楊国忠は蜀に逃れるよう玄宗に勧め、一行は都を出て蜀に向かった。途中、馬嵬駅（陝西省興平市西）で疲弊した将士たちの憤懣が高まったが、この時、禍の源たる楊国忠の誅殺を進言したのが陳玄礼で、子の暄、韓國夫人、秦国夫人等も誅殺され、残った楊貴妃も扼殺された。一方、高適は潼関敗戦後、「駱谷（陝西省整屋県の西南）より西に馳せ、奔りて行在に赴き、河池郡（陝西省鳳県）に及んで、玄宗に謁見」（『旧唐書』卷百十一「高適伝」）した。その後、侍御史となった高適は玄宗に同行して蜀に赴き成都に至る。玄宗の信任を得たことは高適にとって幸いなことではあったが、その直言癖が寵臣たちの反感を買うことになる（「氣を負ひて敢言し、

権幸之を憚る」(同前書)。

この年の七月、肅宗が靈武郡(寧夏回族自治区吳忠市北)で即位し、至徳と改元された。至徳元載(七五六)十二月、高適は淮南節度使に任命されて、広陵等十二郡を領することになったが、これは当地での叛乱を起こした永王璘を討伐するためであった。

擁旌出淮甸 旌を擁して淮甸に出で

入幕徵楚材 幕に入りて楚材を徵す

誓当翦鯨鯢 誓ひて当に鯨鯢を翦るべく

永以竭駑駘 永く以て駑駘を竭くさん

「節度使に任せられ淮南の地に赴き、幕府に入って傑出した人材を徵招する。不義なる永王璘は誓って誅殺すべき者、不才ながらも長く力を尽すつもりだ」。至徳元載十一月、四道節度都使を領して江陵(湖北省)を鎮めていた永王璘は、江淮の地の豊富な租賦を元手に数万人の勇士を召集して叛乱を起こそうとしていた。これより先、入蜀後の玄宗が皇子たちに各地の軍政長官の実権を与えようとした時、高適が反対して諫めたことがあった(初め上皇、諸王を以て分鎮せしむるに、(高)適切に諫めて不可とす)(『旧唐書』卷百十一「高適伝」)。結局、玄宗はこれを聴かず、禍根を残してしまふ。肅宗はこのことを知って高適を召喚し、永王璘の叛乱について問うと、高適は、江東の情勢から見れば、永王璘が必ず敗北するだろうと説いた(適、江東の利害を陳べ、且つ璘の必敗の状を言ふ)『資治通鑑』卷二一九。翌十二月、高適は来瑱・韋陟とともに永王璘討伐の命を受け、安陸(現湖北省安陸市)で盟約の会合をして出発する。翌年至徳

二載(七五七)二月、李成式は李銑とともに璘を討たんとし、揚子(現江蘇省邗江縣南揚子橋付近)に李銑が、瓜歩(現江蘇省邗江縣南瓜州鎮。瓜州)に成式の判官裴茂が陣取り、これを望見した璘の軍は懼れの色を浮かべ、さらに諸将はちりぢりに奔走して、璘の軍はあえなく潰え去った。

高適の「酬裴員外以詩代書」詩について

乾元元年(七五八)、高適は太子詹事に左遷となるが、これは李輔国の讒言によるものである。輔国は肅宗の信任を得て権力を縦にしていたが、「外は恭謹にして寡言なれども、内は狡険なり。張良娣に寵有るを見て、陰かに之に附会し、与に相表裏す」(『資治通鑑』卷二一九)と記されるように、裏表のある性格で、保身のためならばなりふり構わない。例えば、自分と張良娣の罪惡をしばしば肅宗に進言していた建寧王倓に対し、逆に倓が広平王俶を謀殺しようとしていると譖ったため、肅宗の怒りを買って倓は死を賜る。『旧唐書』(卷百十二)「高適伝」に「李輔国、適の敢言するを惡み、上の前に短る」と記すように、高適の直言癖に対して、李輔国はかねてから恨みに思つて讒言したのである。このことについて、詩は、

小人胡不仁 小人胡ぞ仁ならざる

讒我成死灰 我を讒して死灰と成せり

「小人の李輔国は何と不仁な男か、燃えつき冷えきった灰同然と私を讒言した」と詠じる。太子詹事となり洛陽に赴くのは不本意なことではあったが、さすがに肅宗に關しては、

頼得日月明 頼ひに日月の明を得て

照耀無不該 照耀して該(あまね)からざる無し

「幸いにも聖明なる天子の恩恵を受け、その恩沢は天下にあまねく及んだ」と言うにとどめている。しかし、安祿山の叛乱によって洛陽は相当に悲惨な情況だった。

留司洛陽宮 洛陽宮に留司となり

詹府唯蒿菜 詹府唯だ蒿菜のみ

是時掃氛祲 是の時氛祲を掃くも

尚未殲渠魁 尚ほ未だ渠魁を殲ぼさず

背河列長圍 河を背にして長圍を列ぬるも

一八七

上皇（安祿山）の為に賊を討つ」として安慶緒を殺している。

師老将亦乖 師は老い将も亦た乖く

婦軍劇風火 婦軍風火より劇しく

散卒争椎埋 散卒椎埋を争ふ

一夕瀟洛空 一夕瀟洛空しく

生靈悲曝腮 生靈曝腮を悲しむ

「洛陽の留司となり詹事府に行くと、雑草が生え荒廃していた。この時には妖気は一掃され敵の姿は消えていたが、それでもまだ賊軍の首領格は殺されぬまま。黄河を背に鄴城を囲む土塁をめぐらしたが、官軍は疲弊し諸将も足並みが揃わない。敗退する官軍は散々な目にあい、逃げ去った兵たちは争って掠奪した。一晩で洛陽の都は荒涼たるありさまとなり、人々は困難な状況の中で悲しみあえいでいる」。至徳二載（七五七）正月、失明し疽を病んで狂暴化した安祿山は安慶緒等によって殺された。この年の九月、郭子儀が回紇の精兵四千を加えて賊を撃つ機運が熟すと、官軍は長安の西で李嗣業・王思礼とともに賊軍を撃破した。その後、郭子儀は賊軍を追って潼関で撃破し、十月には洛陽も奪回する。一方、鄴城に逃れた安慶緒は河北など諸郡から兵を召募して六万にも及ぶ軍勢にまで回復させていた。

乾元元年（七五八）九月、郭子儀をはじめとする七節度使等に安慶緒討伐の命が下った。敗走する慶緒を鄴まで追い込み囲んだが、慶緒は史思明の救援を待つて固守したため、膠着状態が続いた。詩に「河を背にして長圍を列ぬるも」と詠じるのは、乾元二年（七五九）二月に郭子儀等が鄴城を囲み、土塁を築き塹壕を掘って構えたことを言う。この時も慶緒は堅守して史思明の救援を待つて堪え忍んだ。救援の兵を率いた思明は鄴城近くに陣営を置いて官軍を牽制し、三月、両軍はまた雌雄を決すべく戦う。官軍は奮闘する賊軍によって敗色濃厚となった。勝敗の行方を察知した史思明は、軍を整えて鄴城の南に駐屯していたが、この時、「太

衣冠投草莽 衣冠草莽に投じ

予欲馳江淮 予江淮に馳せんと欲す

登頓宛葉下 宛葉の下に登頓し

棲遑襄鄧隈 襄鄧の隈に棲遑す

城池何蕭條 城池何ぞ蕭條たる

邑屋更崩摧 邑屋更に崩摧せん

縱横荆棘叢 縱横たり荆棘の叢

但見瓦礫堆 但だ見る瓦礫の堆きを

行人無血色 行人血色無く

戰骨多青苔 戰骨青苔多し

「官僚や貴族たちは荒野に逃れ、私も江淮の地に向かおうとした。洛陽の士民は宛（現河南省南陽市）・葉（現河南省平頂山市葉県南）の地で山を上り下りし、官吏たちは慌ただしく襄陽（現湖北省襄陽市）・鄧城（現河南省南陽市鄧州市）の地に向かった。洛陽の都のなんともの寂しいこと、周辺の村里の家々はもつとひどく破壊されていることだろう。辺り構わずイバラが群生し、見えるのは堆く積まれた瓦礫の山ばかり。道を行く人々の顔からは血の気が引き、戦死者の骨にはびっしりと苔が生えている」。乾元二年（七五九）三月、安陽河（洹水。現河南省安陽市北）の北に陣を布いた官軍は歩騎六十万、これに対し、史思明は精兵五万を率いて対抗した。数においてははるかに勝る官軍も、奮撃する思明の兵に圧倒されたのか、李光弼・王思礼・許叔冀・魯炅等の軍は苦戦を強いられた。この後を受けた郭子儀の軍も布陣前に大風に遭い、天地晦冥として咫尺を弁ぜざる中、官賊両軍とも驚き潰え、官軍は南へ賊軍は北へと、それぞれその場を逃れた。先の句に「師は老い将も亦た乖く」と詠じるのは、こうした状況を言うが、これは前年九月に肅宗が七節度使等に安慶緒討伐を命じ

ながら軍を統帥する者を置かなかつたためであつた。このことについて、『資治通鑑』（卷三二〇）は乾元元年九月の條に、「上、（郭）子儀・（李）光弼は皆元勳、相統屬し難きを以ての故に元帥を置かず」と記し、胡三省はこれに「諸軍並行し、歩騎数十万。而れども元帥を置かず、号令ならざるは、安陽の敗有る所以なり」と注している。当時の状況は、同前書（卷三二二）の乾元二年三月の條に「子儀、朔方軍を以て河陽橋を断ち東京を保つ。戦馬万匹、惟だ三千を存するのみ。甲仗十万、遺棄して殆ど尽く」と記すような惨憺たるものであつた。また同條に「東京の市民驚駭し、散じて山谷に奔る。留守の崔圓・河南尹の蘇震等の官吏、南のかた襄鄧に奔る」と記すのは、詩の「宛葉の下に登頓し、襄鄧の隈に棲遑す」の句に相当しよう。高適の「河南の李少尹・畢員外の宅に夜飲せる時、洛陽より捷を告げられ、遂に春酒歌を作るに同ず」詩に「前年持節楚兵を將ゐ、去年留守東京に在り。今年復た二千石を拜し、盛夏五月西南に行く。彭門劍門蜀山の裏、昨に逢ふ軍人の劫かし我より奮ふに（一）昨年淮南節度使として永王璣征討に与り、去年は太子詹事として洛陽にいた。今年はまだ彭州刺史の任を授かり、盛夏五月に西南に赴いた。劍門から彭門へと蜀の山中を行き、昨日は盜賊と化した軍人におどされ掠奪される目にあつた」とあることから、高適も南に奔る官吏とともに洛陽を離れ、彭州刺史として赴任地に向かつたのであろうが、詩の「城池何ぞ蕭條たる」以下六句は洛陽を離れる際に実見したドキュメンタリーと言ふべき内容で、當時の状況が実に生々しく伝わってくる。

四 現況の報告と裴覇への酬答

彭州に赴任後、裴覇の詩を受け取るまでの情況は、以下のように語られてゐる。

遂除彭門守 遂に彭門の守に除せられ
因得朝玉階 因りて玉階に朝するを得たり
激昂仰鴛鷺 激昂鴛鷺を仰ぎ
献替欣塩梅 献替塩梅を欣ぶ
驅伝及遠蕃 驅伝遠蕃に及び
憂思鬱難排 憂思鬱として排し難し
罷人紛争訟 罷人紛として争訟し
賦税如山崖 賦税山崖の如し

「彭州刺史に任せられて、肅宗に謁見することができた。朝官の列に加わる名譽に胸はたかぶり、臣下の進言に耳を傾ける宰相がいることを喜ぶ。車を驅り彭州に赴いたが、鬱たる我が憂いは解かれようも無い。困窮する人々の間では訴え事が絶えず、山の如く重い税が人々を苦しめてゐる」。赴任先で高適を悩ませたのは、乱後の荒れすさんだ人々の心と生活を圧迫する重税であつた。動乱によつて最も苦しむのはこうした人民たちであると実感したのである。

所思在畿甸 思ふ所は畿甸に在り
曾是魯宓侪 曾ては是れ魯宓の侪
自從拜郎官 郎官を拜するより
列宿煥天街 列宿天街に煥く
那能訪遐僻 那ぞ能く遐僻を訪はん
還復寄瓊瓊 還つて復た瓊瓊を寄せらる
金玉本高価 金玉本より高価
頃篋終易諧 頃篋終に諧ひ易し
朗詠臨清秋 朗詠清秋に臨み
涼風下庭槐 涼風庭槐に下る
何意寇盜間 何ぞ意はん寇盜の間

独称名義偕 独り名義を偕にするを称せらるるを

辛酸陳侯誄 辛酸たり陳侯の誄

嘆息季鷹杯 嘆息す季鷹の杯

白日屢分手 白日屢々分手し

青春不再来 青春再びは来らず

臥看中散論 臥して看る中散の論

愁憶太常齋 愁ひて憶ふ太常の齋

酬贈徒為爾 酬贈徒為なるのみ

長歌還自貽 長歌して還た自ら貽ふ

「思うのは長安におられる裴員外のこと、県令の頃には魯の宓子賤のような政治をなされた。吏部員外郎になられてからは、宮中を照らす列宿のような働きをされている。そんなあなたが僻遠の地まで足を運ぶことなどできようか、それでもこうして思いがけず私に詩を贈ってくださいました。あなたの才能は金玉のように優れており、堯と篋とが相和するようにあなたとは気が合う。清らかな秋にあなたの詩を吟じると、涼しい風が庭の槐に吹きわたる。兵乱が続く時代に、思いがけずもあなただけが名実ともに節義を貫き称えられた。あなたが書かれた「陳侯の誄」のなんと悲しみに満ちていることか、張翰のように身後の名を求めず自適の境地にあった陳氏と酒を酌み交わせないのが残念でならない。この世にはしばしば別れがつきまとい、若い日は二度ともどらない。臥しては嵇康の「養生論」を読んで学び、一年三百六十日のうち三百五十九日も齋（ものいみ）した周沢のことを悲しく思う。あなたの詩に酬いた私の詩は拙いもので、吟じては自分で笑っている次第です」。今は吏部員外郎として長安にいる裴覇からの便りは、どんなにか高適の心を慰めたことだろう。

友の詩はその心を表すようで、吟じる高適の心をもすがすがしい気持ちにさせる。時を隔てても遠く別れていても心を通わせることができる友は亡くなった陳氏のために誄を書いてくださった。

『全唐詩』（卷二二）は「辛酸たり陳侯の誄」の句下に、「陳二補闕の銘誄なり。即ち裴の為す所なり」と注している。この陳二は高適「宋中にて陳二に遇ふ」詩の陳二と同一人物で、独孤及「陳賛府兼の辟さるるに応じて京に赴くを送るの序」（『毘陵集』卷十六）に「十二載冬十月、果して公の才を以て徴せらる」と記す陳兼である。梁肅「独孤公行状」（同前書附録）にも「文章を以て梁宋の間に遊び、通人潁川の陳兼・長樂の賈至・渤海の高適、公を見て色授して心服し、子孫の契を約す」とあり、高適と陳兼とが賈至・独孤及とともに早くから友情を結んでいたことが知られる。また、陳兼について「通人」と記すのは、李華「三賢論」（『全唐文』卷三二七）の「潁川の陳兼は器ならず、古の道を行ふ」の評語とともに、高適が詩に「嘆息す季鷹の杯」と詠じる張翰の故事が決して亡友を偲んで誇張した賛辞ではないことを示している。「陳侯の誄」を読んで、陳兼とは二度と杯を交わすことができないのを悲しむとともに、旧友を失った己の心を代弁するような裴覇のことばに高適は心から感動したのである。

〔注記〕拙稿は、四部叢刊所収「高常侍集」（八卷）を底本とし、孫欽善校注修訂本『高適集校注』（上海古籍出版社）及び劉開揚『高適詩集編年箋注』（中華書局）を参考にした。

（本学非常勤講師）